源流の四季

第37号（2010年4月）春
Spring

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428（87）7055 FAX 0428（87）7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@ec3.technowave.ne.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会　NPO法人多摩源流こすげ
印　　刷／（株）サンニチ印刷

紀ノ川吉野川源流岡橋山（撮影 中村文明）

Contents 目次

源流元気再生PJ最終報告会 …… 2～3
源流大学3年間の実践 …… 4～5
第33回多摩川流域セミナー …… 6
平成22年度イベント …… 7
第1回全国源流サミット……8

源流元気再生PJ最終報告会開催

源流元気PJの成果を「NPO法人多摩源流こすげ」に引き継ぐ

源流元気再生プロジェクト運営委員会は、2月22日、小菅村役場2階会議室で元気再生事業最終報告会を開催した。5つの研究室からそれぞれこの2年間の成果と課題が報告され、それを引き継ぐ形で「NPO法人多摩源流こすげ」の設立報告とNPOがこれから目指していくものについての提案が行われた。

源流元気再生PJ最終報告会（2月22日 小菅村役場）

村民と役場が一体となって成果をあげた

黒川文一源流振興課長の司会進行による最終報告会では、降矢英昭村長、小泉守運営委員長、国土交通省京浜河川事務所の山口充弘副所長による挨拶に続いて各室長からの報告、中村文明多摩川源流研究所長より2年間の総括が行われた。引き続き「NPO法人多摩源流こすげ」の紹介に当たって小泉守代表理事からの挨拶、望月徹男同法人事務局長からの提案、理事の紹介の後、宮林茂幸東京農業大学教授、神谷博法政大学講師、山口京浜河川事務所副所長、清水良朗国土交通省関東地方整備局河川部河川環境課係長からのアドバイスをいただいた。

降矢村長は、「2年間に渡り、皆さんに頑張っていただき、これからの小菅村の方向性を示すような幾つかの成果が出てきました。今夜のまとめがこれからの小菅村を作っていく、そんなものになりますようお願い致します」と挨拶した。

小泉運営委員長は、「平成20年度にやってきたことが大変評価され、21年度に継続されました。この評価は源流振興課の歴代の課長さん、源流研究所の所長さんといった方々の努力によるものですが、特記すべきことは村の役場の職員が全員出てきて取り組んだこと、そして村民がそれと共にやってきたこと、このことは大変誇らしいことだと思っております。また、宮林先生をはじめ大勢のアドバイザーの先生方の陰の支援があったということに感謝を申し上げます」と2年間を振り返りながら挨拶した。

続いて、山口京浜河川副所長は、「皆様の貴重な活動の成果を多摩川の流域に発信していただければ参考になるし、流域連携の原動力になると思っています。相変わらず都県、各自治体での行政間の壁というものがございますがそういう壁を破るのは国の役目の一つかなと思って5年ぐらい前から頑張ってきました。これからも多摩川の流域を一体的に管理し、県を超えた多摩川の流域が一丸となって進んでいくよう頑張ります」と参加者を激励した。

研究室最終報告 成果と課題

A 木づかい研究室
（古屋金男室長）

木地師調査の結果を踏まえ、ロクロを使った新たな木材の活用が展開されている。木地師の存在、自然乾燥設備等を組み合わせ、これを交流体験の一つのメニューとして確立して村内指導者の養成を図っていく。また、北都留森林組合が板材生産を事業の一つとして実施していくことを決定した。

B 源流産業開発研究会
（亀井雄次室長）

源流水については、ガロンボトルによるウォーターサーバー方式を検討し現在販売を行う代理店を開拓中。源流弁当については何度か販売したが、現在ヤマメ弁当等を試作し、新しい弁当のPR用レシピをまとめている。今までやってきたふるさと宅急便や源流セットは作っている人の顔が見えるような形にするなど工夫して新たに来年度から販売予定。

C 健康づくり研究室
（守重広子室長）

外来種よりおいしいと言われている小菅在来野菜（トウモロコシ、ジャガイモ、コンニャク、ワサビ、キュウリ、サトイモ）については栽培拡大を図り、観光商品としての利用を推進する。蕎麦の植え付けから試食までの一連の体験が出来るツアーを実施したが、今後、森林セラピー、ヘルスツーリズムの事業化に向けて観光協会等既存組織と連携した運営主体の構築が必要。

D 森林再生研究室
（木下栄行室長）

大橋式路網の科学的検証実験を行い森林作業道の設置基準や作業道規程を設けるデータを得ることができた。また10月には、全国各地から100名の参加者を迎え、国・県への政策提言をする組織として、東京大学酒井秀夫教授を会長に森林作業道研究会を設立した。今後は、村民や森林行政関係者に作業道の必要性と重要性を伝え、森林作業道の普及に努めることが課題。

E 源流文化研究室
（木下正之室長）

木づかい文化再生では小菅における木地師の歴史と古文書、ロクロ等の調査研究を行い、木づかい研究室と合同でロクロを活用した地域づくりを目指しているところ。水の

文化再生では小菅村に20余りの水車があったということで、村の木を99％使った、現物の4分の1の水車を作った。またミニチュアをパーツ販売することも検討中。木の文化再生では村に伝わる白箸づくりと献上に関わる駕籠の調査を行い、芸能保存事業では、神楽の継承用にDVDの作成を行った。地域文化の保存と掘り起こしを今後も継続して行うことと、2年間の調査報告を誰がどのように活かしていくかが課題である。

神谷 博先生

小泉 守代表

山口京浜副所長

望月徹男事務局長

古菅副代表

宮林茂幸先生

「NPO法人多摩源流こすげ」について提案

望月徹男事務局長

2年間の源流再生事業での一番の成果は多くのみなさんがこの事業を通して村づくりに参加したということでした。その意気込みをこれからも大切に続けていきたいと考え、11月26日にこの「NPO法人多摩源流こすげ」を設立しました。その柱として、次の4つを掲げています。1つは、多摩川下流との人的、資金的な強固な枠組み。2つ目は村の資源を活かした特産品の開発、普及。3つ目は健全な森づくり、森林資源の循環、活用。4つ目は上下流交流の推進。この4つの柱はまさにこの2年間行われてきた源流再生事業の柱であり、たくさんの成果です。既存の組織、企業、新しく出来るであろう組織とともに事業を進めていきたいと思います。

アドバイザーからの提案

宮林東京農業大学教授

NPOの設立おめでとうございます。NPOは村と村民、下流域と村あるいは村民のつなぎ役で、営業を徹底的に受け持つことです。それを進めるためには村のグランドデザイン、すなわち村民の理解する長期・短期のビジョンが必要です。この課題については、村民の皆さんと行政が協働して計画を作り、多様な補助事業や委託事業にチャレンジしていくことや国や県に対する補助事業は行政がチャレンジし、その事業の担い手をNPOにすることが大事です。近い将来、合併問題が再来すると思いますがNPOがあれば合併しても今までのように小菅地区としてNPOが中心となって自立を守り、元気な村づくりを進めることが可能です。新しいことはリスクもありますのであまり急ぐ必要はありません。みなさんと一緒に考えていくことが大切です。村にある貴重な宝を協働して磨いて、光ったものをどんどん下流域に宣伝することによって、下流はさらに一緒にやろうということになります。サービスをするということではなく、一緒に汗を流しましょう。そのような中で、フィールドミュージアムとか、源流の郷や源流のふるさとを造るところに参加する協働社会が生まれてくるように思います。そうすると、東京、京都、大阪とは違った新しい日本文化の観光地になると思います。

神谷法政大学専任講師

今日、みなさんのお話を聞いていて、皆さんがおもしろがってやっているということが見えてきてとても素晴らしい成果だと思います。私は源流の木で家を造る活動で、僅かですが5棟造ってきました。修道院と自立の家。大きなモミの木を使ったモミの家。農工大の星野先生の家は今川の檜を大黒柱に使っています。東京経済大学の礒野先生の家は梁に小菅の材料を使っています。今造っている自立の家の男子寮は5月に完成しますが長いこと山になっていた小菅の木をここで使い切れたんです。ゆうゆうの方達とも話したんですが、小菅ならではの変わった樹種、特殊なものを集めて源流プティックのような形で東京で展示して売れるようにしたい。2年後ぐらいには良い形で何か作れるんではないかと思っています。

山口京浜河川副所長

皆様の成果を聞かせていただきましてその活動、熱意に敬意を表したいと思います。現実的な話を1点だけすると、NPOになったということは役務業務を大いばりで受注できる権利があるということです。さらに公的資格を取っていただくと調査業務とかコンサルティング業務も受注できてかなり安定した収入の道が開かれることになるので、この機会にNPOの活動の幅を広げるという意味もあるでしょうし、人材育成ではございませんが源流大学などご利用になって資格を取得されることをお勧めします。

清水国土交通省関東地方整備局河川環境課係長

この元気再生事業は行政刷新会議において来年度からなくなってしまいました。現在は新たな事業（制度）等についても模索している状態でございますので、新たな情報が入りましたら発信して参りたいと思います。また、農林水産省や環境省との連携についても今後調整していかなければと考えております。今後とも小菅村のこの取り組みに協力していきたいと思います。

多摩川源流大学

～三年間の活動を振り返る～

源流大学は今年で三年間の活動が終わり、四年目に突入します。そこで今回は三年間の総まとめとして今までの活動を振り返りたいと思います。また、三年間のまとめとして行われた「源流大学意見交換会」の様子をレポートいたします。

東京農業大学
矢野ちゃん報告

休憩時間も重要な学びの場

源流大学は学生に本物の源流域の生活を体験し、学んでほしいという東京農業大学のプロジェクトとして2007年5月に山梨県小菅村に開校した。現在までに源流大学の授業や、研究室、その他を含め小菅村を訪れた延べ人数は約10000人にもなる。活動の大きな軸としては農大の特別講義である「源流学を学ぶ体験（基礎・応用）コース」がある。この授業では、普段授業だけでは体験できない本物の知恵や技術を学ぶことができる。農家体験や林業体験などで直接地元の講師に地域の抱える課題などを聞くことができるため学生たちにも大変好評だ。

また、小菅村に訪れ、村のおいしいご飯を食べることも学生たちにとっては大きな楽しみであり、その地域の文化を学ぶための重要な要素となっている。

この授業を受講した学生の中には、小菅村のファンになり、個人的に村で農作業などの活動を行っている者もおり、現在は有志団体「源流放課後の会」として、村内の至る所に活動の輪が広がっている。また、地元の住民の方々も彼らの活動に参加し、大変良い関係を築いてくれている。今後も彼らが村内で活躍する姿を期待したい。

そのほかにも源流大学では様々な活動を行ってきた。

その一つとして一般の方を対象とした農大のエクステンションセンター講座がある。源流大学では現在までに多くの講座を開講してきた。どの講座も大変人気があるが、その中でも特に毎年人気があるのは「多摩川源流大学【猟】～猟師と一緒に山歩き～」という講座である。これは、小菅村で「鉄砲ぶち」と呼ばれている猟師の方を講師に招き山での獲物の追い方や、猟での体験談などを教えていただく講座だ。この講座から源流大学のファンになってくれる方も多く、地元講師や学生との交流を大変楽しみにしてくれている。今後も小菅村の魅力を伝えられるような講座を考え、下流域へと発信していくことが重要になってくる。

源流放課後の会の田んぼでの活動

人気の「猟」コース

このような活動以外にも多くの活動を行ってきた源流大学は来年でいよいよ4年目に突入する。一番の目的である学生の学習の場ということ以外にも、小菅村の魅力を下流域にはもちろんだが、小菅村へも伝えていくことが大変重要であることがこの3年間の活動でわかった。なぜなら、源流大学の活動は決して村や村人の協力なくしてはありえないからである。そのため、小菅村の人々が自分たちの村の魅力を再発見し、伝えようと共に努力してくれることが大切であるということがわかった。

村の方々にも顔を覚えていただき、挨拶をしてくださったり、家に招いたりしてくださるようになった。その信頼関係がより強固なものとなるようにこれからも、源流大学は進化をつづけていく。

様々な源流大学の活動。多くの人々によって支えられている。

意見交換会開催

平成二十二年三月三日、小菅村役場二階で源流大学の今後について意見交換会を行った。当日は夜遅くの開催にも関わらず、二十名程度の住民の方、役場の方が来てくださり、和気あいあいとした雰囲気の中話し合いが行われた。

意見交換会の前には、法政大学の学生による卒業論文の発表や源流大学の活動報告などが行われた。その後、三班に分かれ「源流大学に具体的に期待することはなにか」「その際住民として何ができるか」の二点について話し合われた。三十分という短い時間ではあったが、終了のベルが鳴っても気づかないほど真剣に意見交換が行われた。住民の中からは「小菅村の観光マップを地区ごとに作ってほしい」「村で取り組んでいるマコモタケの栽培を一緒にやってほしい」「自分の家の畑を手伝いに来てほしい」といった具体的な提案や「学生に自分たちの村のことをもっと学んでほしい」「一緒に村について考えてほしい」といった意見も出ていた。学生からは「住民ともっと交流する場がほしい」「もっと色々なことを教えてほしい」という意見が出た。他の班の発表を聞いた後、「交流の仕方が分からない」「どうすれば意見交換会などに住民が来てくれるか」ということが話し合われた。終了後も参加者の熱気で熱くなるほどであった。参加してくださった皆様、本当にありがとうございました。

学生と住民がともに輪になって

代表で三名の学生に意見交換会に参加した感想を述べてもらった。

小林徹行　森林総合科学科　三年

＊普段、源流大学の活動について、村の方と深くお話をする機会があまりなかったので、とても有意義な会だったと思います。僕らが考えていることを伝えることもできましたし、村の方々がどのような期待をかけてくれているかを聞かせていただくことも出来て良かったです。

中村淳美　森林総合科学科　三年

＊共感し合えることやお互いに改善していきたいこと、こうなっていったらいいという夢など、たくさんの想いが飛び交ってとても勉強になり、そしてなんだかパワーをもらいました。『小菅×源流大学×学生』。これからも、小菅村に関わるたくさんの方々と様々なお話をしていけたらいいと思います。

阿部咲子　醸造科学科　二年

＊村でのこれからの活動を住民の方々と共に進めていくことは重要であり、そのための大切な交流会でした。次回は、今回は参加出来なかった方々ともお話ししたり、意見を出しあったりしながら交流を深め、新しい視点を築きたいです。

第33回 多摩川流域セミナーを開催

京浜河川事務所調査課
佐々木　舞

２００９年（平成21年）12月５日（土）、多摩川流域懇談会主催による、第33回多摩川流域セミナーが、開館10周年を迎えた二ヶ領せせらぎ館で開催され、１００名を超える流域の市民が参加し、会場内は活気にあふれていました。

多摩川では源流から河口まで多摩川に関心のある数多くの市民や市民団体が、〈いい川づくり〉の実現を目指し、活動・交流していますが、この〈いい川づくり〉の輪を育て、そして広げていくには更なる「連携」が重要であるため、今回のセミナーは「育てよう多摩川でつながる市民の輪」～〈いい川〉づくりの実現に向けて～をテーマに進められました。まず、鶴見川流域ネットワーキング代表理事の慶應大学教授・岸由二先生により「流域思考と市民活動」と題して基調講演が行われ、セミナーの第１部は「市民と市民の連携」として、各市民団体の流域での活動についてリレートーク形式での発表、第２部は「市民と行政の連携」として、市民・行政の立場から５名のパネラーによるパネルディスカッション形式での意見交換を行いました。同時に、せせらぎ館の１階では、多摩川流域で活動されている12の市民団体による「ポスターセッション」も開催されました。

また、お昼には防災炊き出し訓練として、「地産地消・多摩川鍋」などが振る舞われ、心温まる交流が行われました。

セミナーの開催にあたり、多摩川流域懇談会の運営委員会委員長の中村文明さんより、「このセミナーの主催である多摩川流域懇談会は、多摩川をよくしていくために流域の市民団体と河川管理者、自治体が本当のパートナーシップを確立してきました。これからは、次の世代によりよい多摩川をつないでいけたら。」と挨拶がありました。

基調講演は、長年鶴見川流域で市民活動をされ、最近では養老孟司氏と共著「環境を知るとはどういうことか～流域思考のすすめ～」を発刊された岸由二先生により「流域思考と市民活動」と題して行われ、「一人の力では到底実行出来ることではないことでも、流域全体で考えを共有する人が集まり、連携していくことで実現が可能になっていく仕組みである。」「我々の足元、活動している場所、住んでいる場所から流域は始まっている。」など、市民と行政がお互いにどのように連携を図って解決していくべきかなど、多摩川でも課題であり、今後の活動に活かせるお話をされました。

セミナー第１部の「市民と市民の連携」と題したリレートークでは、流域での市民活動を活性化させていくために、市民団体の活動内容をはじめ、市民団体同士の交流の様子や抱える問題などについて話題提供をしていただきました。

発表者は、多摩川流域で活動する「かわさき水辺の楽校：佐々木梅吉さん」「狛江水辺の楽校：竹本久志さん」「調布水辺の楽校：杉山典子さん」「多摩川ふれあい教室：山道省三さん」「地域パートナーシップ：小野紀之さん」「多摩川源流大学：石坂慎吾さん」の６団体の方にしていただき、「市民と市民の連携」に加え、多摩川に対する想いとともに、「もっと若い世代に活動に参加してもらいたい。」、「次世代の活動を担う人材を育成したい。」などの今後の課題なども問題提起されました。

セミナー第２部の「市民と行政の連携」と題したパネルディスカッションでは、市民・自治体・河川管理者などが、お互いの協力関係を築き、信頼関係を深めつつ《いい川づくり》の実践を支援していく上で、市民と行政の連携の有無、それぞれが抱える問題点、行政に対する意見要望はあるかなどについて確認、情報を共有するために行われました。パネラーには、神谷博さん（野川流域連絡会）、中村文明さん（多摩川源流研究所）、竹本久志さん（狛江水辺の楽校）、本木紀彰さん（川崎市総合企画局：現　幸区長）、元永秀さん（京浜河川事務所長）を迎え、「市民が中心になりつつも、行政も同じ枠組みで参加して共有化できることを連携する。」、「河川には管理する上で国と県の境があるが、市民の連携には壁がない。」、「ほどよい距離感を保ちながら同じ方向を向いて一緒にあるく共同歩調が大切。」などの意見が出され、これからもより「連携」を深めていくために現在出来ていることや、今後の取り組みに向けた課題などが意見交換されました。

今回のセミナーでは、市民と市民、市民と行政の連携がそれぞれの活動の輪を広げ、流域全体を活気にあふれさせていくことが確認されるとともに、市民と行政が立場・役割をお互いが認め合い、役割を果たすことが大事であるということについて、ゆるやかな合意を図ることができました。

第33回多摩川流域セミナー（平成21年10月5日 せせらぎ館）

イベント紹介

NPO法人多摩源流こすげ・小菅村・源流研究所

平成二十二年度

小菅村に地域づくり、地域振興、人材育成、上下流交流推進の新しい組織・NPO法人多摩源流こすげが誕生しました。村と村民が一体となり元気で温かい源流の村　こすげ」を目指し「源流を誇りにみんな一緒に協働のむらづくり」に取り組みます。ご理解とご協力をお願いします。

多摩川の最初の一滴を求めて
源流・水干探訪の旅

多摩川の最初の一滴は笠取山の山頂近くの水干から流れ落ちます。無数の沢が寄り合い、川幅を広げ水量を増し、水干沢、一ノ瀬川本谷、一ノ瀬川、丹波川、多摩川と名前を変え、138キロを旅して東京湾に流れ着きます。新緑の季節のなか、多摩川の源流を尋ね、その流れに思いをはせてみませんか。

笠取山登山口の作場平からの水干往復は、よく整備された登山道を使った約6時間の山歩きです。お友達を誘って、是非お出かけください。

日　時　6月5日(土)～6日(日)
集　合　JR奥多摩駅　午前10時
費　用　1万3千円(宿泊費1泊4食付き・保険料・入浴料・指導料・その他)
対　象　健康で山歩きに自信のある方
定　員　20名(参加者多数の場合は抽選となります)

水干の様子

秘境・妙見五段の滝探訪

多摩川の源流を流れる小菅川。大菩薩・妙見の頭(標高1975m)から流れ落ちる小菅川の源流にある妙見五段の滝へ向かう旅です。この滝には、地元の人しか知らない道を通ってやっとたどり着くことができます。ガイド付きツアーでしか行くことのできない本物の源流を見に来ませんか。

日　時　7月3日(土)～4日(日)
集　合　JR奥多摩駅
　　午前10時
費　用　1万3千円(宿泊費1泊4食付き・保険料・入浴料・指導料・その他)
対　象　健康で山歩きに自信のある方
定　員　25名(参加者多数の場合は抽選となります)

妙見五段の滝

源流体験教室開催団体募集

子供達に本物の自然を知ってほしい、その素晴らしさを知ってほしいとの願いから源流体験教室を開催しています。昨年は、社会教育会館や水辺の楽校、育成会、青少年委員会など24団体が源流体験教室を実施しました。子供達の目の輝きが違います。是非お問い合わせください。

期　間　7月から9月上旬
場　所　多摩川源流小菅川源流体験ゾーン

お問い合わせ
NPO法人多摩源流こすげ(多摩川源流研究所)
電　話　0428-87-7055
ファクス　0428-87-7057

源流体験の様子

第1回全国源流サミットの開催要綱（案）

全国源流サミット開催の趣旨

今、全国各地の源流が大きな転機を迎えています。昭和30年代に植樹されたスギやヒノキの人工林が伐期を迎えているにも拘わらず、木材価格の低迷で管理が放置され、国土や生態系の保全、森林の持続的な経営の点から憂慮すべき事態を迎えています。一方地球温暖化防止の上から、森林の有する二酸化炭素の吸収や水源涵養機能など多面的機能の持続的発展へ大きな期待が寄せられています。サミットの開催地の道志村には、80年前から横浜市の水源林が存在し、都市が支える水源の森のあり方を考える上で意義深い取り組みが展開されています。

第１回全国源流サミットでは、道志村の歴史と文化に学びながら、全国の源流でどんな取り組みが実践されているかを解明し、未来に向かって何が出来るか真剣に議論して源流の価値と可能性を共に探求していきたいと思います。是非ご参加下さい。

参加無料

第1回全国源流サミットの開催要綱

- 日　　時　　2010年10月23日（土）24日（日）　23日 11：00　開会
- 場　　所　　山梨県道志村及び相模川源流域
- 記念講演　　「柳田国男が愛した道志村」（試案）
- 特別報告　　全国源流の郷協議会
- 基調提案　　「源流は日本の宝ー源流の未来へ光りあれ」（試案）
- パネルディスカッション（予定）
  - 道志村
  - 相模川流域
  - 全国源流の郷
  - 横浜市
  - NPO法人　全国源流ネットワーク
  - 河川管理者
- コーディネーター
- 次期開催地挨拶
- 第二日目　　相模川源流の魅力を探る体験型イベント
- 主　　催　　第１回全国源流サミット現地実行委員会
- 共　　催　　道志村・NPO法人全国源流ネットワーク・全国源流の郷協議会
- 協　　力　　桂川・相模川流域ネットワーク　桂川・相模川流域協議会
- 後　　援　　国土交通省・環境省・農林水産省・山梨県（予定）
- 連 絡 先　　第１回全国源流サミット現地実行委員会
  道志村役場　〒402-0209　南都留郡道志村6181-1
  電話 0554-52-2111　FAX 0554-52-2572

この事業は河川環境管理財団の助成を受けて実施しています